

4 湖北の農事文化

○ハンノキのあったほ場景観

◆ハンノキの利用

畦畔木とハンノキ

湖北地域の水田ほ場には、かつて畦沿いに「ハンノキ」というカバノキ科の樹木が多く植えられていました。全国的には、畦畔に植えられている木を品種を問わずに「畦畔木」と呼んでいましたが、特に湖北地域では、畦畔木はほとんどが「ハンノキ」だったため、畦畔木のことを「ハンノキ」と呼んでいました。

ハンノキの役割

ハンノキは、営農に役に立つ様々な機能を持っていました。夏には木陰が貴重な休息場所となり、秋には刈り取ったイネを干す稲架（ハサ）をくくる柱として使われました。「照り降り十日」と言われるように、湖北地域は収穫期に時雨れることが多く、天気を予想しにくいのですが、収穫した稲を稲架にかけておくと、天候に依らずに10日目には最適な乾燥状態に仕上がる、とする先人の知恵も伝わっていました。



▲昭和54年5月：布施（長浜市）
『消えたハンノキの里—懐かしの田んぼの風景—』より転載

◆ハンノキの消失

明治の伐採危機

ハンノキは、明治時代に一度、消滅の危機がありました。明治42年、ハンノキは田に陰を作り収量を低下させる「耕作障害木」とみなされ、強制的に伐採する条例が出されました。しかし、農家の反発もあり、ハンノキは復活していきました。

昭和のほ場整備

昭和47年以降、ほ場整備の工事が

湖北一帯で実施され、ハンノキは伐採されることとなりました。

先に「ほ場整備とむらの景観の一大変化…宇曾川流域」で紹介した秦荘の畦畔木と同様の時期に、湖北のハンノキも伐採され、集落の景観は一変しました。

（参考）

内藤又一郎 (2001)『消えたハンノキの里—懐かしの田んぼの風景—内藤又一郎写真集』内藤順子 p.46-47
『特集 湖北用水史』、『みーな—びわ湖から—』126号, p.12, 長浜みーな協会



▲昭和49年4月：西柳野（長浜市）
『消えたハンノキの里—懐かしの田んぼの風景—』より転載



▲熊野山より東を望む（ほ場整備前後の比較）
上：昭和46年8月 下：昭和62年5月
『消えたハンノキの里—懐かしの田んぼの風景—』より転載

○湖北の祭事文化

◆雨乞いをルーツとする太鼓踊り

湖北地域の村々では、夏から秋にかけて、色鮮やかな衣装を身にまとい、太鼓や鉦など鳴り物を使って演奏しながら舞う「太鼓踊り」が行われます。その形式は村によって異なる特色を持っており、華やかな郷土芸能として受け継がれてきました。

この太鼓踊りは、渇水時の雨乞い習俗が起源といわれています。湖北の川は流域が狭いため、夏場に日照りが続くと、川の表流水が無くなる「瀬切れ」がよく起こります。用水不足が起こりやすく、井戸やため池の水も不足するため、農民は天に恵みの雨を請うしか仕方がなかったといえます。太鼓踊りは、次第に天の恵みに感謝し、降雨と豊作に対するお礼と喜びの踊りに変化し、華麗さを増して実施されるようになってきました。

太鼓踊りは、長年村人の手によって引き継がれてきましたが、民俗芸能文化を継続する難しさに直面しています。少子高齢化によって、祭りの担い手となる若年層が都市に流出し、踊り手となる子供が少なくなっています。また、村の近代化、人間関係の希薄化、衣装や太鼓などの道具の補修や祭りの開催費用の負担など、祭りは継続の危機にあります。



▲伊吹山奉納太鼓踊・米原市上野 [『滋賀文化のススメ』より転載]



▲伊吹山奉納太鼓踊（米原市）[提供：滋賀県]

次の世代へと、伝統をいかに伝えて残していくか、祭りの原点を見つめて、考えることも求められます。

伊吹町上野（現米原市）の 伊吹山奉納太鼓踊り

『うちの太鼓はバチを高く掲げ、足を力強く地に下ろす動作が特徴。雷を起こそうとする様子をあらわしているんですよ（※1）』上野の太鼓踊りは伊吹山登山口にある三之宮神社で行われていた雨乞いをベースとしています。

※引用1「特集 響け！ 笛太鼓 受け継がれる郷土芸能」、『みーなびわ湖からー』128号, p.10

伝承では、村人は日照りが続くと三之宮神社に集い、早朝から晩まで三日三晩雨乞いを行ったといえます。時に

は七日七夜続く時もあり、それでも雨が降らない時は、全員が早朝から伊吹山に登り、頂上で火を焚いて、太鼓や鉦を鳴らし、雷踊りで祈願したそうです。

雨乞いをしていても雨が降らない日が続けば、寺の梵鐘を担いで山に登ることも行われました。梵鐘の上部には、龍の頭をかたどった龍頭と呼ばれる造形があります。水神の象徴である龍頭を、天により近い位置で沼や池に漬けて祈るために山に登っていたようです。昭和43年に、伊吹山の中腹から梵鐘が見つかりました。これは、雨乞いの後に龍の魂が抜けた梵鐘が埋葬されたものかもしれません。

上野の太鼓踊りは、17世紀末にはすでに行われており、大正13年まで続けられました。その後断絶しましたが、郷土芸能を復活させようと、村民が伊吹山奉納太鼓踊保存会を組織し、昭和42年に復活しました。以後、5年に一度、10月の第一日曜日に開催されています。190戸の上野集落で、総勢170人が踊り手となり、祭りの前には3ヶ月間の練習を重ね、伝承されています。

上野の太鼓踊りには、指導者の世代交代や練習時間の確保といった課題もあるようです。しかし、地元を離れても、太鼓踊りのために戻ってくる若者もいるなど、太鼓踊りの文化は村に根付き、継承されています。

西浅井町集福寺（現長浜市）の 花笠踊り（チャンチャコ踊り）

西浅井町集福寺の花笠踊りは、8月16日に行われており、鉦や太鼓の「チャカチャンチャン」という音から、別名チャンチャコ踊りとも呼ばれます。花笠踊りは20曲が伝承されており、その中に「雨乞い踊り」の演目もあります。

集福寺は、古くから北陸と近畿を結ぶ塩津街道（現国道8号）沿いに位置しています。また、塩津街道の集福寺口から東へ向かうと、北国街道（現国道365号）に短絡する峠道があります。このような立地のため人の往来が多く、街道を通過する参勤交代の行列を模したとされる「奴振り」が演じられています。

集落では、毎年実施を検討しますが、総勢35名の参加者を確保することが難しい実情もあるようです。



▲ちゃんちゃこ祭り（長浜市）
【提供：滋賀県】



▲ちゃんちゃこ祭り（長浜市）
【提供：滋賀県】

○オコナイ

滋賀県の多くの集落では、毎年1～3月に「オコナイ」と呼ばれる行事が行われます。先に紹介した「春日祭」もオコナイの一種です。オコナイでは、神社（あるいは仏堂）に



▲川道町のオコナイ（長浜市）【提供：長浜市】

特大の鏡餅や造花などの飾り物を供え、新年の村内の安全とその年の五穀豊穡を願います。

オコナイという言葉には、「^{けっさい}潔斎する」「^{しゅしょうえ}祈祷する」という意味があり、延暦寺や東大寺などの寺院における新年の勤行（修生会）が起源といわれています。

湖北地域では戦国時代から江戸時代初期にかけて、天台宗から浄土真宗への改宗がなされたため、それまでの仏像は別に設けられた仏堂に移されました。オコナイの場合も、同時に仏堂と同じ境内に祀られた鎮守社に移動したと考えられています。元は仏教の僧侶がオコナイを執り行っていたましたが、湖北では、オコナイの運営が寺院から中世惣村の宮座に移り、そのまま現代の村落による運営へと引き継がれています。

オコナイの運営責任者であるトウヤは持ち回りとする事が多く、負担が大きいことから、村によって行事の簡素化も進んでいます。今後、どのような形で後世に伝えていくかが課題となっています。

川道のオコナイ

川道町（現長浜市）のオコナイは湖北最大の規模として有名です。古式の神事を厳格に伝えており、毎年

3月1日の本祭と、その前日の宵宮が行われます。30～50戸で構成される7組の村が、それぞれ90kgもある大きな御鏡餅をこしらえて、川道神社へ献鏡します。

祭りの当番（トウヤ）は、1年間鳥獣肉・卵類を断ち、^{しょうじんけっさい}精進潔斎することが求められます。宵宮の日には餅がつかれ、トウヤ宅に運び込まれます。座敷での宴の後、夜9時過ぎに献鏡の儀式が始まり、裸足に半分の大きさの草鞋を履いた半纏姿で、神輿に載せた御鏡を神社に運び込みます。

翌日の本祭には、晴れ着を着た若衆たちが神社に参集し、式典の後、御鏡を各組へ持ち帰り、均等に分配して各家にて供えます。こうしてオコナイを終えた後に春を迎えます。

（参考）

「特集 響け！ 笛太鼓 受け継がれる郷土芸能」、『みーなーびわ湖から』128号、p.2-7, 10-12, 30, 長浜みーな協会
長浜市立長浜城歴史博物館編（2000）『近江の太鼓踊り—龍神信仰と雨乞い踊り—』p.5-11, 26-27, 30-31, 長浜市立長浜城歴史博物館
中島誠一・上田洋平・原田信男（2008）『オコナイ—湖国・祭りのかたち—』p.6-17, 62-64, INAX 出版
滋賀銀行業務推進部編（1996）『滋賀の祭り—と伝承行事100選—』p.120-121, 125, 127, 133, しがぎん健康友の会・しがぎんみずうみクラブ